木精

森鷗外

巌(いわ)が屏風(びょうぶ)のように立っている。登山をする人が、始めて深山薄雪草(みやまうすゆきそう)の白い花を見付けて喜ぶのは、ここの谷間である。フランツはいつもここへ来てハルロオと呼ぶ。

麻のようなブロンドな頭を振り立って、どうかしたら羅馬(ロオマ)法皇の宮廷へでも生捕(いけど)られて行きそうな高音でハルロオと呼ぶのである。

呼んでしまってじいっとして待っている。

暫(しばら)くすると、大きい鈍いコントルバスのような声でハルロオと答える。

これが木精(こだま)である。

フランツはなんにも知らない。ただ暖かい野の朝、雲雀(ひばり)が飛び立って鳴くように、冷たい草叢(くさむら)の夕(ゆうべ)、蛼(こおろぎ)が忍びやかに鳴く様に、ここへ来てハルロオと呼ぶのである。しかし木精の答えてくれるのが嬉(うれ)しい。木精に答えて貰(もら)うために呼ぶのではない。呼べば答えるのが当り前である。日の明るく照っている処に立っていれば、影が地に落ちる。地に影を落すために立っているのではない。立っていれば影が差すのが当り前である。そしてその当り前の事が嬉しいのである。

フランツは父が麓(ふもと)の町から始めて小さい沓(くつ)を買って来て穿(は)かせてくれた時から、ここへ来てハルロオと

呼ぶ。呼べばいつでも木精の答えないことはない。
フランツは段々大きくなった。そして父の手伝をさせられるようになった。それで久しい間例の岩の前へ来ずにいた。
ある日の朝である。山を一面に包んでいた雪が、巓にだけ残って方々の樅の木立が緑の色を現して、深い深い谷川の底を、水がごうごうと鳴って流れる頃の事である。フランツは久振で例の岩の前に来た。
そして例のようにハルロオと呼んだ。
麻のようなブロンドな頭を振り立って呼んだ。しかし声は少し荒を帯びた次高音になっているのである。

呼んでしまって、じいっとして待っている。

暫くしてもう木精が答える頃だなと思うのに、山はひっそりしてなんにも聞えない。ただ深い深い谷川がごうごうと鳴っているばかりである。

フランツは久しく木精と問答をしなかったので、自分が時間の感じを誤っているかと思って、また暫くじいっとして待っていた。

木精はやはり答えない。

フランツはじいっとしていつまでもいつまでも待っている。

木精はいつまでもいつまでも答えない。

これまでいつも答えた木精が、どうしても答えないはずはない。もしや木精は答えたのを、自分がどうかして聞かなかったのではないかと思った。
フランツは前より大きい声をしてハルロオと呼んだ。
そしてまたじいっとして待っている。
もう答えるはずだと思う時間が立つ。
山はひっそりしていて、ごうごうという谷川の音がするばかりである。
また前に待った程の時間が立つ。
聞こえるものは谷川の音ばかりである。
これまではフランツはただ不思議だ不思議だと思っ

ていたばかりであったが、この時になって急に何とも言えない程心細く寂しくなった。譬(たと)えばこれまで自由に動かすことの出来た手足が、ふいと動かなくなったような感じである。麻痺(まひ)の感じである。麻痺は一部分の死である。死の息が始めてフランツの項(うなじ)に触れたのである。フランツは麻のようなブロンドな髪が一本一本逆に竪(た)つような心持がして、何を見るともなしに、身の周匝(まわり)を見廻した。目に触れる程のものに、何の変った事もない。目の前には例の岩が屛風の様に立っている。日の光がところどころ霧の幕を穿(うが)って、樅の木立を現わしている。風の少しもない日の癖で、霧が

忽(たちま)ち細い雨になって、今まで見えていた樅の木立がまた隠れる。谷川の音の太い鈍い調子を破って、どこかで清い鈴の音がする。牝牛(めうし)の頸(くび)に懸けてある鈴であろう。

フランツは雨に濡れるのも知らずに、じいっと考えている。余り不思議なので、夢ではないかとも思って見た。しかしどうも夢ではなさそうである。

暫くしてフランツは何か思い付いたというような風で、「木精は死んだのだ」とつぶやいた。そしてぼんやり自分の住んでいる村の方へ引き返した。

同じ日の夕方であった。フランツはどうも木精の事

が気に掛かってならないので、また例の岩の処へ出掛けた。

この日丁度午過（ひるすぎ）から極（ごく）軽い風が吹いて、高い処にも低い処にも団（まろ）がっていた雲が少しずつ動き出した。そして銀色に光る山の巓が一つ見え二つ見えて来た。フランツが二度目に出掛けた頃には、巓という巓が、藍色（あいいろ）に晴れ渡った空にはっきりと画かれていた。そして断崖（だんがい）になって、山の骨のむき出されているあたりは、紫を帯びた紅（くれない）に匂（にお）うのである。

フランツが例の岩の処に近づくと、忽ち木精の声が賑（にぎ）やかに聞えた。小さい時から聞き馴れた、大きい、

鈍い、コントルバスのような木精の声である。
フランツは「おや、木精だ」と、覚えず耳を欹（そばだ）てた。そして何を考える隙（ひま）もなく駈け出した。例の岩の処に子供の集まっているのが見える。子供は七人である。皆ブリュネットな髪をしている。血色の好い丈夫そうな子供である。
フランツはついに見たことのない子供の群れを見て、気兼をして立ち留まった。
子供達は皆じいっとして木精を聞いていたのであるが、木精の声が止んでしまうと、また声を揃えてハルロオと呼んだ。

勇ましい、底力のある声である。

暫くすると木精が答えた。大きい大きい声である。山々に響き谷々に響く。

空に聳(そび)えている山々の巓は、この時あざやかな紅に染まる。そしてあちこちにある樅の木立は次第に濃くなる鼠色(ねずみいろ)に漬(ひた)されて行く。

七人の知らぬ子供達は皆じいっとして、木精の尻声(しりごえ)が微かになって消えてしまうまで聞いている。どの子の顔にも喜びの色が輝いている。その色は生の色である。

群れを離れてやはりじいっとして聞いているフラン

ツが顔にも喜びが閃（ひらめ）いた。それは木精の死なないことを知ったからである。

フランツは何と思ってか、そのまま踵（きびす）を旋（めぐ）らして、自分の住んでいる村の方へ帰った。

歩きながらフランツはこんな事を考えた。あの子供達はどこから来たのだろう。麓の方に新しい村が出来て、遠い国から海を渡って来た人達がそこに住んでいるということだ。あれはおおかたその村の子供達だろう。あれが呼ぶハルロオには木精が答える。自分のハルロオに答えないので、木精が死んだかと思ったのは、間違であった。木精は死なない。しかしもう自分は呼

ぶことは廃そう。こん度呼んで見たら、答えるかも知れないが、もう廃そう。

闇が次第に低い処から高い処へ昇って行って、山々の巓は最後の光を見せて、とうとう闇に包まれてしまった。村の家にちらほら燈火が附き始めた。

（明治四十三年一月）

底本：「普請中　青年　森鷗外全集2」ちくま文庫、筑摩書房
1995（平成7）年7月24日第1刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版森鷗外全集」筑摩書房
1971（昭和46）年4月～9月刊
入力：鈴木修一
校正：mayu
2001年7月31日公開
2006年4月28日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。